

いずみ

発行所 福井県大野郡和泉村公民館
印刷所 松浦印刷所

三月二十二日に招集された和泉村第三回定例会議において総額四千三百四十五万一千円の予算が議決されたが、さる七月二十二日の第四回定例会議に於て七百六十九万四千七百円の追加とともに大きな更正を加えられて総額五千四百四十七万七千七百円の予算となった。

第一次追加 和泉村總予算額 五、一、一四五、七〇〇円

〔歳入の部〕	
一、村税	一、五〇〇、〇〇〇円
二、地方交付税	八、七八〇、〇〇〇円
三、公企業及財産収入	二〇、〇〇〇円
四、使用料及手数料	四七六、〇〇〇円
五、国庫支出金	七、二八七、七〇〇円
六、県支出金	二、七八二、一〇〇円
七、寄附金	六、七八五、〇〇〇円
八、繰越金	一、二四〇、〇〇〇円
九、雑収入	一、五〇〇、〇〇〇円
十、村債	八、五〇〇、〇〇〇円
合計	五、一、一四五、七〇〇円
〔歳出の部〕	
一、議会費	八一四、八〇〇円
二、役場費	七、二九四、〇〇〇円
三、消防費	七、二九四、〇〇〇円
四、土木費	一、五九三、〇〇〇円
五、教育費	一四、四一六、〇〇〇円
六、社会及労働費	一三、〇六一、一〇〇円
七、衛生費	三、六五〇、〇〇〇円
八、産業経済費	二、三一六、〇〇〇円
九、財産費	二、一九九、五〇〇円
一〇、統計費	五八一、〇〇〇円
一一、選挙費	三、〇〇〇円
一二、諸支出金	二九三、〇〇〇円
一三、公債費	二、〇八八、〇〇〇円
一四、予備費	四九五、三〇〇円
合計	五、一、一四五、七〇〇円

歳入の三六パーセントは補助金

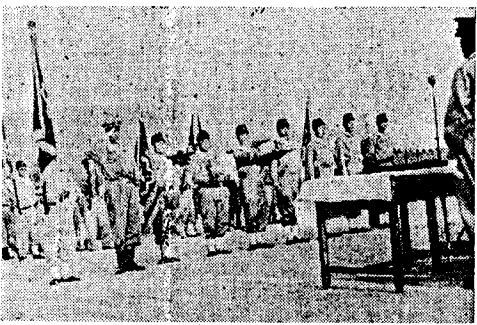
この予算によつてまず第一に村民各位に訴えねばならないことは和泉村の財政は大きく国や県に依存しているという事実であつて、地方交付税、国庫支出金及び県支出金の総計は一千八百八十四万九千八百円、実に全歳入の三六%である。従つて、いわゆる「自主的」という言葉は財政面には通用しない。政治、行政の大部分は国と県の援助の手の動く方向に従つて大きく左右されている。われわれはこの三六%の縮小に、将来何年かかつてもこつこつと努力を積んで行かねばならない。即ち村民各自の所得水準を向上せしめて「自主的」財政の建設を期さなければならぬのであるが、その建設の目的はどこにおくべきであるか。

土木関係に ばく大な費用

次いで歳出であるが、議会においても予算を審議するに當つて、歳入を後廻しにして歳出を先に審議するほどに歳出は村民に関心があつた。従つて歳出の割振りには審議を重ね、いわゆる「削る」という言葉は主として歳出面に用いられるが、できるだけ要求される額を削ることなく各方面の必要経費を充足したい事は山々であるけれども、到底充分な需要を充たすことが出来ぬ。補助金は歳入面から御理解頂けるとおもう。

栄光は、わが和泉 村消防団に輝く

七月十二日、吉田郡松岡小学校において昭和三十二年高志地区消防操法競技大会、同じく福井県消防操法競技大会が開催され、本村消防団はこれに参加し石神団長を中心とする団員の一糸乱れぬ団結と日ごろの猛訓練は実を結び遂に高志、県とも晴れの優勝旗を獲得した。



勝利の栄光 昭和32年度福井県消防操法競技大会(手引きカッソリ部)に於いて優勝旗授与の感激に胸高なる和泉村消防団 (32.7.12日 於松岡小学校)

汲めども尽きぬ生命力

村長 杉本又助

わが和泉村が合併し新築す一人前に成人しつつあるのです。足して近一周年を迎えようとしています。大事な村政を預り歩いてきましたこの一年を回想します時、あまりにもあわただしい時間の流れと共に無量の感慨に打たれます。幸いに賢明な議員各位を始め囑託員の方々、各種委員会の方々や絶大な御援助を戴きます村民各位の御援助のお蔭によつて今日までようよう運んできました。然しながらその実績はまことにおほいさしい次第で、村民の皆さまに到底御満足頂けるものではありません。計画も愈々実行するとなると殆んど全面的に再検討を要する部分が多岐にわたるに要するに財源の裏付けが問題なのでありまして、当初われわれは村の名が示すが如く

き、地下の開発は大きな資本を要するが、地上の建設は努力によつてなされる。急転直下、結論を下すならば、植林政策が大きく論じられねばならぬといふことである。

つた時があつたので、この問題は議会の大きな懸案となつて、三六%を国や県に依存して、なおかつ年々大きな借金を重ねて行かねばならない村の現状であつて、地元の寄附(負担)なしに公共施設を施工することは甚だ難事であるので、村政にたずさる方々の御理解のこと、全村民各位の深い御理解のある協力を願ひするものである。

は植林費であつて、村有林の新植と下刈に計上されたもの、年々歳々経費されることによつて前記に繰返した三六%をいつの日か縮小するに役立とうという希望のある数字である。だがこれもせめて借金のなし崩しに充たされる金(公債費)がこれ(財産費)ならならぬと思ふのはあえて筆者だけの嘆きではなからう。

中々も珪酸石灰を使う事によつてもち病に対する抵抗力が一層強くなり、発病を認めれば農薬の散布によつて殆んど完全と言ふまでに被害を防止できるようになつた事は稲作の大きな進歩でありま

稲作技術を進めよう 共同の力で収穫を多く



穂先もたわわに出揃わんとする初秋の田園 早や豊年の太鼓の音が鎮守の森から聞えるようだ (朝日郊外にて)

ことしは春から天候が悪く、稲の生育は平年に比べて数日おくれしていますが、作況は不思議に思う程よくできています。今から開花・結実期と重要な時期をひかえています。天候さえよければ三年連続の豊作も夢ではなくなるでしょう。

近ごろ稲作りが安定してきた事は、この地方では春遅くまで温度が低い早播、早植ができたことが低く、保温折衷苗代によつて早期に、然も安全に丈夫な良い苗が育てられるようになったために、本田の稲の生育も大変よくなり、これに加えて肥料の施し方や管理の方法も適切に行われるようになったので、稲作りの欠点であつた「おそでき」も段々と解消され、また天候が悪く稲が弱く育つ

「役場だより」

△戦没者慰霊祭 九月上旬執行しますから御参詣下さい。
▽村会議員選挙 九月下旬「学校だより」
△朝日小学校 七月十日 保健衛生研究会を開き郡市内から多数の先生方が参加しました。

地理的な不便の解消へ一役 「いずみ」の編集あいさつ 天高く空すみ渡る初秋の涼風が実る穂波を渡る九月一日、公報第一号が「いずみ」と名づけられては村の委嘱を受けて公民館が発刊することになりました。これは村の委嘱を受けて公民館が発刊することになりました。これは村の委嘱を受けて公民館が発刊することになりました。

△公報は村の動くようすをできるだけわしく知って頂くためと、建設的な意見を盛りあげて村の人々が心から融合しながら改善進歩していく原動力となるよう希望しております。
△村合併は一年にも充たないのに村政全般が軌道にのりつつあることは喜ばしいかぎりであり、地形的に部落が散在して村民各位が膝つきあわせて語りあうような機会が困難であるのでこの公報によつて以上のような意味の補いをつけば有難いと思ひます。
△このような意味で、編集担当者の方々から御意見や原稿の御依頼願ひします。将来皆さまの御要望によつて研究、工夫し改善して、漸次立派なものにして村民の御期待に添いたいと思ひますのでよろしく願ひします。

筆のさんぽ道



新しく生れた村だより「いずみ」が今月号より発行される。とく昔から農村の人は読んだり書いたりするのが不得手なようである。...

学級ごとに自由な学び方

青年学級開講

かねてから若い人たちの念願であった和泉村青年学級の開講式は、梅雨も上つた七月二十八日、大和小学校に於いて盛大に行われた。...

組織強化と生活記録

2青年団が合併し新出発

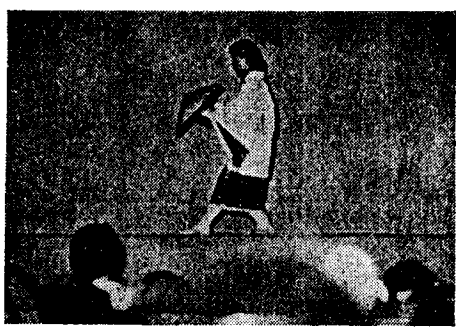
昨年九月三十日、旧上下穴馬村が合併し新しく和泉村が誕生したのであります。...

第一回陸上競技大会
当日一日だけという好天気にめぐまれた七月二十九日、第一回陸上競技大会を大和校庭に於いて開催、和泉村四チームの若人が集まり盛大に行われた。

好評だった婦人講習会
お盆の一日を熱心に受講
ことしはじめて婦人教育推進特別指定地区として、日進小学校で講習会を開催された。

部落探訪記

村公報が発刊されましたが、合併村であるため村内の各部落のことについてお互いによく知らないことがあるかと思ひ、暫く各部落の代表的なことを取りあげて御紹介したいと思います。...



- 出生
後野 三島健太郎 二男 政昭
大納 長尾 明 長男 輝昭
野尻 原田一二 長女 瞳
伊勢 大倉武男 三女 若穂
大納 山下藤雄 二女 里美
岩田真一 長女 真澄

- PTA便り
(大和・中学校)▽八月下旬総会を開き決算認定、予算審議を行いました。...

皇居清掃旅行をするにあたって
上穴馬婦人会、木島スエノ
こんど私も約五十名が皇居の清掃を許されまして、九月九日から清掃旅行に出かけることになりました。

文藝
(詩)夏の昼
朝日中三年 平野武子
おしよせてくる入道雲
その中に 時々
太陽の光がはしる
それもつかの間
雲は 今までの
むねのような空
ぐんとおのびました
夕立がくるのだ、
ぱつぱつと 降ってきた
どこかで 雷がなる

俳句
(俳)句
松田忠直 (青年)
いつまでも ふりたるうでや
おしみり

子供の絵日記から
(後野分校)
一年 すもりふみよ
七月二十五日 うちのしたのまわ

空
朝日小五年 平野富美子
青い空は
どこまでいっても きりがいい
空は
深い深い 遠い所にあるのだ
私は天使になって
空の奥深く いつて見たい
そこには
やさしい山ゆりの花が
咲いているだろう
その花を 頭にかざして
空の奥深く
一人であのしく
おどりたい

短歌
(短)歌
大納中一年 藤田親養
夏の風 風鈴ならし りんりん
子らのほろを なでながらゆく
大納中一年 福井トモ子
名も知らぬ 小さい草を 本におし
静かな山の 夏休みかな

空
(編)集(後)記
七月二十一日 ぼくがねようとして
ると、ちやうど、でんわをかけて
きた。いとうさんという人がみ
町七十五番へたのだから、み
なのところへきた。そしておそ
しい話をしました。
それはさむい冬でした。ぼくが
まんぶの所をみると、女の声で
「さむい、さむい」という声が
しました。ぼくがマツチをみると、
それはこじきでした。

空
(編)集(後)記
七月二十一日 ぼくがねようとして
ると、ちやうど、でんわをかけて
きた。いとうさんという人がみ
町七十五番へたのだから、み
なのところへきた。そしておそ
しい話をしました。
それはさむい冬でした。ぼくが
まんぶの所をみると、女の声で
「さむい、さむい」という声が
しました。ぼくがマツチをみると、
それはこじきでした。